

腰椎椎間板ヘルニアの Cutting Edge

波呂浩孝

Hirota HARO

山梨大学大学院
整形外科科学講座

腰椎椎間板ヘルニアの有病率は約1%であり、腰痛の約4%の原因、という報告があり、罹患率が高い疾患である。また、20~40歳台に発症するため、社会に及ぼす影響が極めて大きい。その病態は1934年のNew England Journal of Medicineに発表され、その外科的治療は1939年にJAMA誌に掲載されており、長い歴史をもつ疾患であるが、未だすべてが解決されているわけではない。

2021年5月1日に「腰椎椎間板ヘルニア診療ガイドライン2021(改訂第3版)」が発行され、この策定の業務を行う榮譽をいただいた。第2版から研究が進んだ薬物治療や外科的治療の分野がある反面、疫学や病態や保存治療は今後の研究の進捗が非常に望まれる結果となった。

本号では、この局面を打破することを目的に、新進気鋭・英邁活達な本邦の整形外科医にお集まりいただき、敢えて1. 未解明の領域である椎間板ヘルニアの炎症と自然退縮のメカニズムの研究の現状、また、2. 椎間板ヘルニア発症前あるいは椎間板ヘルニア摘出後の椎間板変性の進行を予防することを目的とした、細胞移植による椎間板再生、多血小板血漿を用いた椎間板内治療、超高純度の硬化性ゲルと間葉系幹細胞を用いた再生医療、による社会実装の現状、3. 本邦発の椎間板ヘルニアに対する椎間板内治療の臨床成績と課題、4. 診療ガイドラインからみた治療の実際、5. 局麻を用いた低侵襲外科的治療、について豊富に図を用いて、読者にわかりやすく説明していただいた。さまざまな職種の整形外科医師にとって、きっとお役に立てる特集であると思う。また、コメディカルのスタッフにも極めて有用な内容となっており、今後ますますの腰椎椎間板ヘルニア診療の発展に直結するものと祈念している。